

挑む!

禅寺などで庭園を手入れする庭師

北山 浩士さん(33)

整える 庭の歴史と自分の色と



京都市出身。北山造園(075・463・4945)は、高台寺や建仁寺、六道珍皇寺など京都の禅寺のほか、岡山や札幌の寺、民家の庭も手がける。

紅葉の名所として知られる京都・高台寺。この禅寺に毎日のように通い、庭園の手入れをしている。余分な枝や枯れた葉を切り、雑草を取る。「庭園の景色を、いかに自然の原風景に近づけられるか。全体的なバランスを大事にしています」

父の安夫さん(68)は「現代の名工」に選ばれた庭師。小学生のころから夏休みに高台寺などで父を手伝った。東京農業大で造園を学び、大学院を出て、親交のある住職に弟子入り。僧名

「宗浩」を授かり、1年半、建仁寺の僧堂(専門道場)で修行した。

その後、実家の北山造園に入り、各地の寺や一般家庭の庭に向く。父が手がけた南アフリカやイタリアの日本庭園の手入れに携わったこともある。料亭や京町家の庭は、きらびやかに仕立てる。一方で、寺の庭園は華美になり過ぎないように気をつける。「葉も枝も切ったら戻らない。どこにはさみを入れるか自分で決めるように、自分の道は自分で築くしかない」

京都の庭園には歴史の積み重ねがある。植えた木が景色としてなじむまで何十年もかかる。「自分の主張を押しつけず、歴史の重みを尊重し、先人の思いに配慮する。そのなかで自分の色を出し、自分の考えを貫き通す。庭園に完成はありません」

文・岡田匠 写真・植谷綾二

記者から

歴史や伝統を守りつつ「自らの色」を出す。この難行に挑む若き庭師の重責や心意気を感じた。